

氏名(本籍)	むら た ひろし 村 田 宏 (静岡県)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博乙第2030号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	20世紀前半のフランスとアメリカの美的交流についての研究 —トランスアトランティック・モダン—
主査	筑波大学教授 博士(芸術学) 五十殿 利 治
副査	筑波大学教授 Dr. Phil. 中 山 典 夫
副査	筑波大学助教授 博士(芸術学) 守 屋 正 彦
副査	山形大学助教授 博士(芸術学) 小 林 俊 介

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は西洋の近代美術史を主導したフランス美術とアメリカ美術との交流について、大西洋を往還するモダンな美的交渉という視点から考察した論考である。構成としては、序と9章と結語から成る。付録として、参考文献目録が付されている。

序では、研究目的、研究対象、研究方法、そして論文構成が述べられる。研究目的としては、本論文が個別の作家や両国の美術史ではなく、「美的交流」の分析を主眼とするものであることが主張されている。とりわけ、フランスにおける「Américanisme」とアメリカにおける「Americanness」が問題の焦点であるとされる。研究方法の問題としては、とくに副題にある「モダン」という概念規定について、反伝統をつねに指向する自己運動としての「モダニズム」とは異なる動態としての美術史を扱うことを強調している。

第1章は1910年代-20年代のフランスにおいてアメリカに対する特別な観念が生まれる契機として、1917年のロシア・バレエ団によるバレエ劇「パレード」における登場人物「アメリカの少女」に着目して、ピカソがアメリカ映画に靈感源を求めた可能性を指摘して、アメリカ的なものの芸術的な意味を跡づける。

第2章は、フランスの画家マルセル・デュシャン、フランシス・ピカビアの刺戟に触発されながら、アメリカ的なもの、すなわち「Americanness」の探求に情熱を傾けたニューヨークの芸術家、モートン・シャンパークとチャールズ・シーラーの模索に着目して、とくに「機械」を重要なテーマとして設定して行った試みを検証する。

第3章は、建築における「アメリカへの回帰」という観点に立ち、1920年代のフランク・ロイド・ライトの軌跡について、とくにハリウッドに近いところに立ち、アメリカ土着のプレ=コロンビア文化に触発された「ホリィホック・ハウス」を中心にして論じる。この時期のライト建築は、やがて隆盛する「アメリカ的な建築」の発端であり、「アール・デコ建築」の原型の一部が形成された。

第4章は、第一次世界大戦後にとくにラテン文化の諸国において優勢となった傾向、すなわち「アメリカ礼讃」とちょうど表裏一体の関係にある、古典古代への憧憬に基づく「古典主義的傾向」を、パブロ・ピカソをはじめとする一連の画家のなかに探り、その歴史意識と歴史的回顧の特質を浮彫にする。

第5章は、フェルナン・レジェの映画「バレエ・メカニック」(1924)の成立過程と四人のアメリカの芸術家(ダドリー・マーフィー、エズラ・パウンド、マン・レイ、ジョージ・アンタイル)とのかかわりを論じ、その共同作業の実態を考察するとともに、映画製作がレジェの絵画にどのような影響をもたらしたかを検証する。ついで第6章は、そのレジェが映画とともに重要な仕事とみなしていた演劇、バレエの舞台装置や衣裳のデザインに着目し、バレエ・スエドワによるバレエ劇「スケート・リンク」(1922)を題材としつつ、レジェの「スペクタクル」論を詳細に検討している。

第7章は、フランスとアメリカの美的交感を体現しながら、一時画家としては忘却されていたジェラルド・マーフィーを取りあげ、ピカソらとの交友の様相を確認しながら、代表的作品である、バレエ・スエドワによるバレエ劇「割当内で」(1923)の舞台装置を中心に論じる。

第8章は、ファシズムと共産主義が鋭く対立した、いわゆる「赤い30年代」のフランス美術について、1937年人民戦線内閣のもとで開催されたパリ万博で展示されたレジェの壁画「力の伝達」を取り上げて論じる。そこでフランスとアメリカという従来の構図に、ソ連という新たな因子がレジェ芸術に加わることを確認する。

第9章では、キューバからスペイン、フランスを経て再びキューバに帰還した画家ヴィルフред・ラムの作品の検討を通して、フランスとアメリカの間の大西洋の往還から若干ずれるものの、キューバの民間信仰や中国の煉丹術など、思いがけない振幅と深度をそなえた別の芸術的な射程が開けてくることを論じている。

結語では、これまでの議論をまとめるとともに、本研究で取り上げられていない美術家(ルイス・ロゾウィック等)や亡命シュルレアリスムなどの諸問題を今後の研究の展望として述べて、論文を総括している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

西洋近代美術史における研究テーマはいぜんとして、近代国家の枠組に大きく規定されているが、本研究はフランスとアメリカ二国の近代美術史の比較という単純な構図ではなく、よりダイナミックな芸術的な交流を具体的に跡づけようとする新たな視点、すなわち「トランスアトランティック・モダン」の構築を目指したものである。

これまでも同種の試みは、たとえば、パリのポンピドゥー・センターによる一連の二大都市間の芸術交流を探る展覧会のひとつとして「パリ＝ニューヨーク」展(1977)という大規模な企画があった。だが、それは規模に比例して概論的なもの以上ではなく、それゆえ創造的な交流を浮彫にするというような内容ではなかった。また、それ以後、これに続くような学問的な試みがなかったことも見逃せない。

くわえて、著者は単に二国間の交流という点に視野を限定せずに、その交流から派生する問題についても着実に対応している。ひとつは、1930年代における政治の問題、つまりソビエト・ロシアへの憧憬であり、さらにまた最終章のヴィルフред・ラムをめぐる論考では、中国にまで問題領域を拡大させて、20世紀的な美的交流のもうひとつのグローバルな枠組の存在を示唆している。

本論文においては、「パリ＝ニューヨーク」的な大きな枠取りの内実を丁寧に埋めることが目指された。そのために、著者は長年にわたる文献の渉猟と調査を重ねている。たしかに、本論文で論及された画家たち、ピカソ、レジェなどについてはすでに夥しいといえるほどの研究論文が書かれているが、しかし、それらをきちんと参照しながらも、独自の領域を開拓した著者の基本的な学問的姿勢は一貫し、徹底している。実際に引用され、参照された文献は、20世紀美術史の専門家にとっては当然とはいえ、多岐にわたるものである。その点で、美術史のみならず、映画史、演劇史、音楽史、文学史など、他の領域に対する積極的な知的探求心に裏付けられた考察が、本研究には貫かれていることは強調されなくてはならない。また、調査について

も、遺族へのインタビューをはじめ、欧米各地への実地調査が本研究の多くの章の信頼できる記述を支えていることが窺われる。

以上から、本論文は、著者ならではの独創的な視点を導入し、従来の美術史の研究を大きく前進させる労作であり、20世紀美術の動態に独自の論考を加えた論文として高く評価できるものである。本論文により、著者の研究目的は概ね達成したといえるが、今後は1930年代から戦時中における亡命美術家たちの動向とアメリカ美術家との交流とその実態などについて、さらに調査研究を進める一方、射程を深くして、戦後の現代アメリカ美術の世界進出へとつながる美術史にも展開するように、一層の精進を期待するものである。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。